

■ 小 学 校 編 ■

読書力を高め言語文化に参加する児童の育成
～読解と読書の融合をめざすミステリーのシリーズ読書～船橋市立西海神小学校教諭 さんぐう ま ゆ み
三宮真由美

1 研究の概要

国語教育においては長年、読解と読書はともに重要であるとされながらも、実際には分析的な読解指導が優先され、読書指導は発展的な扱いにされがちであった。一方、欧米では、読解と読書が区別されることなく行われ、それらを融合した読書力が重視されている。各種の学力調査では、読書習慣がある児童ほど読解力の得点が高い傾向にあるという結果が出ており、読書が読解力の向上にもたらす効果は大きい。読書を基盤として効果的に読みの力を高めていくような学習指導が更に求められている。

そこで本研究では、読書を通して読解が進み、更なる読書へと誘うような学習方法の開発を行う。具体的にはミステリーの古典的名作であるシャーロック・ホームズシリーズを読み、ガイドブックを作るという、読書活動を基盤とした言語活動を設定する。ミステリーはどの世代にも人気の高いジャンルであるが、国語教育において読書材として取り入れられることは少なかった。しかし、ミステリーは他のジャンルに比べ構成が捉えやすく、人物像や登場人物の利害関係を精読することや、動機や伏線や手がかりなどの様々な情報を相互に関係付け、分析し解釈して読むことを、他のジャンルよりも強く要求する。またシリーズで読むことで、複数のテキストを比較し評価する力を高めることができる。このようにミステリーをシリーズで読むことを通して構成や人物を捉えるといった文学を読む上で必要な読みの力に加え、分析的に読み解

釈し評価するといった読みの力をも高めることができるのである。

また、読書教育においては量を読むことに関心が向きがちであるが、読書の質自体を上げていくことが大切である。シャーロック・ホームズシリーズは、120年もの間世界中で読み継がれてきた古典的名作であり、多くのパステイシュ（作風の模倣）やシャーロッキアンと呼ばれる愛好家が存在する。当シリーズを読むことは、これら読書生活者の言語文化の継承と創造の営みを知り、体験することでもある。このようにして、本を取り巻く言語文化に参加することが、読書の質を高め、更なる読書を生むのである。

以上のように、読書活動を基盤としたホームズシリーズのガイドブック作りの言語活動が、読解と読書を融合した読書力を高めることに有効であるとともに、本を取り巻く言語文化に主体的に参加できる児童を育てることができると考え、本主題を設定した。

2 研究の実際

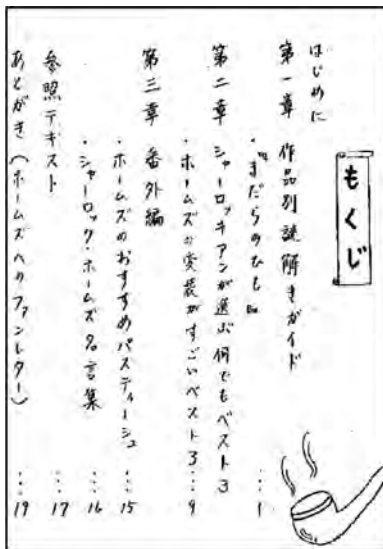
(1) 第一次 シリーズに興味・関心をもち、学習の見通しをもとう（2時間）

1時間目は、クイズや人形劇のDVD視聴、教師自作のホームズ新聞等で、シリーズへの誘いを行った。授業後には多くの児童が並行読書のコーナーへ行き、本を借りていた。

2時間目に教師見本を一人一冊ずつ配った。モデルを具体的に示すことで、どんな

読みの力や学習が必要かを、児童は明確に見通すことができた。次時から学習する共通教材『まだらのひも』を、四つの翻訳テキストの中から一冊選択させた。児童は同じ作品なのに、様々な翻訳が存在することを知り

驚いていた。活字の小さい本に対し抵抗感がある児童には易しめの翻訳テキストを与えたところ、すぐに読み終え、次も読みたいと意欲的だった。多様な翻訳テキストを持つシャーロック・ホームズシリーズだからこその支援だと感じた。



教師見本のもくじ

(2)第2次 ミステリーを分析的に読み解釈し、「第1章 作品編」を作ろう(8時間)

1時間目は共通教材の人物描写と、教師見本の重要人物プロフィール・人物相関図を比較・分析したところ、ガイドブックに書く際には、「端的な言葉でまとめる・プロフィールは内容別に分類して書く・絵や



児童の作成した重要人物プロフィールと人物相関図

図などを入れてわかりやすくする」等の工夫に気付くことができ、全員が選んだ作品についての重要人物プロフィールや人物相関図をかくことができた。

2時間目はあらすじの書き方を学習した。まずミステリーの4部構成—事件の発端・事件の概要・探偵の推理・事件の真相—を意識し、各段落の文字数に軽重をつけたあらすじの教師見本を3パターン示し比較した。その後児童に好きなパターンを選択させ、全員が4段落構成を意識してあらすじを書くことができた。

3・4時間目は、動機や伏線・事件の手がかりについて読み取った。児童は、人物の描写や動機・様々な現場の手がかりを相互に関係付けることで、事件の真相につながる伏線を複数見つけることができた。始め伏線とは何かも知らなかった児童たちが、「伏線が何か考えながら読むと早く真相にたどり着ける」などと、ミステリーを読むコツに気付くことができた。

(3)第3次 シリーズ作品を読み評価する「第2章 ベスト3」や、シリーズの魅力を伝える「第3章 番外編」を書き、ガイドブックを完成させよう(8時間)

1時間目は、ベスト3作品を選ぶ観点をグループや全体で話し合い、自分の観点を決定した。個性的な登場人物や刺激的な結末に魅力を感じ、それらに関することを観点到に挙げる児童が多く、シリーズに対する愛着の気持ちが表れていた。

2時間目は教師見本の批評文を分析し、上位へ向かう段落構成や順位づけの理由や根拠、本文の引用に気づくことができた。また、批評文中に評価語彙が使われていることを知り、「自分たちも評価語彙集の言葉を使ってかっこいい文章を書いてみたい」という声が多く上がった。

3時間目に自分の選んだ観点について3作品を選び構成メモを書いたところ、順位

付けに悩む児童が多かった。そこで4時間目に同じ作品を読んでいる児童同士でグループを作り、互いの構成メモを読み合った。自分の悩んでいる点について互いに助言し合うことで、構成メモを修正することができた。批評文の清書の際には、ほとんどの児童が教師見本の構成や表現を真似ながら一人で書き進めることができた。

並行して「番外編」作りを行った。各々が「パスティーシュ紹介」「ホームズ名言集」等のテーマを設定し、生き生きと取り組んでいた。シリーズ作品を読むだけでなく、パスティーシュを読む、シャーロック・ホームズの関連書籍で調べるといった読書の広がりが見られ、シリーズを取り巻く文化に主体的に参加する姿が見られた。最後にガイドブックの製本を行った。「あとがき」や「奥付」といった本の形式やきまりに触れ、本を作るといった言語文化にも楽しみながら参加することができた。

(4)第4次 身に付いた学習の価値を振り返り、シリーズの魅力を広めよう（1時間）

まず「この学習を成功させるためのコツについて話し合おう。」と投げかけ、学習を振り返った。読解の視点では、⑤⑥⑦のような文学を読む力に加え、⑧⑨のようなミステリーならではの読みの力や、⑬のような作品を評価する力が高まったことがわかる。読書の視点では、②④⑥⑦のように、様々な翻訳テキストや関連図書への読書の広がりが見られた。

学習の最後には、あとがきにかえてホームズへファンレターを書きたいという児童が半数以上いた。「少しでも時間があればホームズを読むようになった」「自分もホームズのパスティーシュを作りたい」のように、読書にのめり込む姿や本を取り巻く言語文化に主体的に参加する姿が見られた。最後には学校図書館だけでなく地域の図書

館にもガイドブックを置いてホームズを広めたいという声が上がリ、図書館の協力を得て、実現することができた。

作品編を書くコツ	①内容を細く読み取る ②想像して読む ③くり返し読む ④大事な所をメモしたり付箋を貼ったりして読む ⑤人物の特徴や台詞を読み取る ⑥絵を入れて人物関係を書く ⑦あらすじは、大事な所を落とさず短くまとめる ⑧絵や線は、自分の好きな点で描く ⑨絵や線を使って登場人物の様子を表現する	ガイドブックを作るコツ	⑩伝えたいことをくわしくはっきりさせて書く ⑪読者が楽しめるように書く ⑫絵や線を入れて、わかりやすく書く ⑬本物の本のように書く ⑭空欄を空ける ⑮ひきつづけるような表現にする ⑯きれいに印刷する ⑰学習を振り返ってあとがきを書く
ベスト3を書くコツ	①テーマに合った本をたくさん読む ②気になる人物を描いて読む ③作品のよいところはしっかりと描いて読む ④好きな場面をきりきり書きする ⑤読者がわかるように書く ⑥自分の言葉を使って文を書く	シャーロック・ホームズに学ぶコツ	⑦本をたくさん読む ⑧ホームズの魅力を見つける ⑨違う視点で読む ⑩「ステーション」や「シャーロック・ホームズ」の本を読む ⑪ガイドブックをどんどん作る

学習の振り返り

3 成果と課題

(1)成果

①読書活動を基盤としたミステリーのガイドブック作りを通して、文学を読む上で必要な読みの力に加え、分析し解釈し評価するといった読みの力を身に付け、読解と読書を融合した読書力を高めることができた。よって、読書力を高める読書材としてミステリーは有効であった。

②シャーロック・ホームズを読書材にして読書活動を行うことで、シリーズの歴史的・文化的な価値に触れ、その体験をガイドブックに表現することで、シリーズを取り巻く言語文化に主体的に参加することができた。このことから、本を取り巻く言語文化に参加する児童を育てる上で、シャーロック・ホームズのシリーズ読書は有効であった。

(2)課題

他のミステリーシリーズも取り入れた読書活動を通して、読書力を高める単元づくりを継続して探究する。

中学校編

思考力・表現力を育む学習指導の在り方

～「一次関数」における既習事項と関連付けて学習していく活動を通して～

茂原市立南中学校教諭 なかだて 中舘 たけまさ 武優



1 研究主題について

学習指導要領解説編では、「基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る観点から、算数・数学の内容の系統性を重視しつつ、学年間や学校段階間で内容の一部を重複させて、発達や学年の段階に応じた反復（スパイラル）による教育課程を編成できるように」と述べている。そこで、本研究では、生徒が苦手意識をもちやすい一次関数に焦点を当てる。新しい学習内容を指導する際に、関連する既習内容を再確認し、その内容を基にして発展させる活動を通して、より一層の理解を目指す学習指導の在り方を探っていきたいと考えた。思考するきっかけは問題解決の場が有効である。思考するためには、既習内容を基に発展・拡張させることが必要である。そのためには、常に既習内容から数学的な内容を想起し、それらをどのように解決したかを思い出すことが大切である。繰り返し学習とは、知識を定着させるためと思われがちであるが、思考力を育てる絶好の場面であると考え、本主題を設定した。

2 研究目標

一次関数の単元を学習する際に、既習の学習と本時の学習内容を関連付けることにより、基礎・基本の定着と思考力・表現力の育成を目指す学習指導の在り方を抽出生徒の変容から探る。

3 研究の実際

(1)研究仮説

①身近にある素材を扱い、既習の「比例」

と比較・検討する場を取り入れた学習指導を行えば、補充的な学び直しをすることができ、基礎・基本の定着につながるであろう。

②既習内容や生徒自身が見つけ出した見方・考え方に振り返らせる学習指導を行えば、既習事項と関連付けてよりよいものを求めようと思いを高めることができるようになるであろう。

(2)研究の具体的な内容

①「思考力」のとらえ方

思考を働かせるため、場面設定の大切さについて和田(1997)は「思考をはたらかせるためには、習慣的手段によっては解決し得ないような状況に置かれることが大切である」*1と述べている。思考力をはたらかせるためには、次の2点が大切であると考えた。

- 一人一人が多様な考え方をを用いて問題を解決することが必要であるということ
- 集団において多様な考え方が出されることが必要であるということ

②「思考をはたらかせたか」のとらえ方

和田(1997)の文献をもとに、生徒が思考をはたらかせたかどうかを、本研究では、次の2点に注目した。

- ありきたりの方法以外の方法を工夫して問題を解決できたか
- 問題の解決の手段に変化が生じたかどうか

(3) 検証授業の内容及び抽出生徒の変容

① 指導計画ならびに授業実践の主な内容

時数	学習内容	(・) 手立てのねらい (○) 具体的な手立て
第1時	一次関数とグラフ 学び直しⅠ 《関数の意味と既習事項の確認》	・小学校で扱う関数の題材から、ともなう変化する2つの量を想起させることにより、表・式・グラフの学び直しの場とする。 ○ $x=0$ のときに $y=0$ にならない関数を取り上げ、比例と一次関数の共通点と相違点を明らかにする。
第3時	一次関数の値の変化 学び直しⅡ 《表から変化の様子を読み取ることの確認》	・ $y=2x+b$ のグラフを使い、2点間の変化の様子を矢印で階段状に示したことを想起させることにより、変化の割合を具体的に捉えやすくする。 ○ 警戒意識を促し、変化の割合の具体的なイメージをもたせる。
第6時	一次関数のグラフ 学び直しⅢ 《グラフや座標の確認》	・ 座標を結ぶ活動を通して、座標の意味や点を plot することの学び直しの場とする。 ○ 点を結んでカタツムリを作る(学校図書館1 数科書)活動させ、座標についての理解を深める。
第9時	一次関数の式を求めること 学び直しⅣ 《式を求めることの確認》	・ 第8時までの既習内容を確認した上で、式からグラフをかく手順を想起させ、式を求めるポイントを考えるきっかけとする。 ○ 既習内容の定着を図るために、自分の考えを言葉で説明させ、理解を深める。
第15時	一次関数の利用① 《線香の燃焼実験》	・ ともなう変化する2つの量について調べる活動を取り入れ、自分の考えを分かりやすく伝えることをねらいとする。 ○ 線香の燃焼実験の結果から、帰納的に考え、単純化していくことにより、一次関数とみなすことのよさに気付かせる。
第16時	一次関数の利用② 《携帯電話の料金プラン》	・ 2つの量の変化や対応の様子を、表やグラフ、式を使って比較する活動を通して、相手に分かりやすく伝えることをねらいとする。 ○ 携帯電話の料金プランの検討から、先のことを予測することができるという関数のよさを味わわせる。
第17時 第18時	一次関数の利用③ 《ダイヤグラム》	・ 一次関数として処理することのよさを数学的活動を通して感じ取ることとをねらいとする。 ○ 2時間限りの授業を通して、直線的な変化をする事象の例としてダイヤグラムを取り上げる。

資料1 検証授業の指導計画

(ア) 第1時《関数の意味と既習事項の確認》

$y = 2x + b$ を導く過程で一般化の考えの育成を目指す。

(イ) 第3時《表から変化の様子を読み取ることの確認》

変化の割合は常に一定になることを調べる活動を取り入れる。活動を通して一般化の考えと帰納的な考えの育成を目指す。

(ウ) 第15時《一次関数とみなすことのよさを知る》

線香の燃焼実験を通して、2つの数量関係について調べる活動を取り入れる。自分の考えを分かりやすく伝え、多様な考え方を引き出すことを目指す。

第15時 学習プリント

☆線香が燃える様子を、一次関数を使って考えよう。

今日の学習問題

線香に火をつけたとき、時間にもなう線香の長さがあるように変化するのを調べる実験を5分間行いました。次の表は、線香に火をつけてから x 分後の線香の長さを y cm として、測定の結果をまとめたものです。

時 間 (x 分)	0	1	2	3	4	5	6
線香の長さ (y cm)	10	9.4	9	8.6	8.3	8	

測定から得られたデータをもとに、線香が燃え尽きる時間を求めてみよう。

資料2 第15時 学習プリント(一部)

② 下位の生徒の変容 (資料3)

第1時では、 x と y の対応表を作れず点のプロットもできなかった。そのために表の値の組と座標を一致させ、グラフを書くプロセスを確認させた。第15時では、データの値を点としてプロットし、その傾向から帰納的に考え、線香が燃え尽きる時間を

予想した。根拠を明らかにし自分の考えを書いたと思われる。

《問い》『直線と x 軸と交わるところが燃え尽きる(問題把握) 時間を表しているのではないだろうか?』

①(予想) データを直線とみて、 x 軸と交わる点を求めるとよいのでは?

②(計画) この線が伸びて x 軸と交わったところが、燃え尽きる場合であるから、線ひきで少しだけ引き、延長してみる。

【帰納的な考え方】

(手立て) 定規で直線をひき、交点が(25, 0)になることを実際に確認させることが必要。この活動が式を作ることにつながると考える。

③(実行) (24, 0) で交わりそうだから、24分で燃え尽きるだろう。

資料3 下位の生徒の様子(第15時)

(4) 検証授業における仮説の検証及び考察

① 仮説①についての検証

(ア) 実態調査の結果から

どの設問においても正答率は向上したが、比例の補充的な学び直しとしては不十分であることが明らかとなった。知識だけを学び直すのではなく、生徒が学び直した事柄を使って本時の学習につなげていけるような主体的な学び直しが必要である。

(イ) 抽出生徒の結果から

下位の生徒は、座標における点のプロットやグラフをかくことについて学び直しの成果が現れている。一方で、 x と y の関係を式に表すことについての理解が不十分である。中位の生徒は、比例の学び直しが十分にでき、既習の学習を振り返る場を意図的に設けることは学び直しにたいへん有効であり、場を工夫することが重要であることが明らかとなった。

② 仮説②についての検証

(ア) 意識調査の結果から

関数のよさについての認識について(資料4)から分析する。本実践を通して関数が役に立つと感じた生徒が増加した。しかし(17)では、クラスによって対照的な結果となった。

比較・検討の場面で、多様な考え方が出たクラスがより肯定的な回答をしており、集団で多様な考え方が出されることが、学習への理解をより高めることにつながると思われる。

次に、既習事項に関連付けることの有効性について分析する。本実践では、意図的に既習の学習内容に関連付ける学習指導を行ったことにより、(6)では2クラスとも肯定的な回答が事前に比べ若干ではあるが増加した。授業の最初に、前回の学習内容を振り返った。そのことが、本時の問題を自力解決するためのヒントや類推して考えるきっかけとなったと思われる。また、既習内容にヒントを得ることが有効であったかについては、(18)で肯定的な回答の割合はあまり変らなかった。振り返った既習内容が、生徒が学習を進めていく際の基礎・基本となり、実際に活用できるような工夫が必要である。

(11)関数の学習は将来役に立つと思うか				
調査	肯定(1又は2と回答)		否定(3又は4と回答)	
	クラスA	クラスB	クラスA	クラスB
事前	48.6	45.7	48.6	51.4
事後	57.1	60.0	37.1	33.3
(16)関数で学習したことを活用すると、身のまわりのことがらの様子を簡潔に表現できると思うか				
事前	27.0	42.9	70.3	54.3
事後	42.9	56.7	51.4	36.7
(17)関数で学習したことを活用すると、未知のことがらを予測したり、推測したりできると思うか				
事前	32.4	42.9	64.9	54.3
事後	71.4	43.3	22.9	50.0
(6)分からない問題を解くときに、以前学習した内容にヒントがないかと振り返ることがあったか				
事前	67.6	71.4	29.7	25.7
事後	74.3	73.3	20.0	20.0
(18)分からない問題があったら、今まで習ったことを参考にすると解くことができると思うか				
事前	62.1	71.4	35.1	25.7
事後	62.9	70.0	31.4	23.3

資料4 意識調査の結果から

※ クラスA…事前n=37,事後n=35 クラスB…事前n=35,事後n=30 単位(%)

(イ)下位の抽出生徒Aの変容から

生徒Aは当初は座標を読み取れず、座標を点としてプロットすることが正確にできないため、自信をもってグラフをかくことができないという課題が見られた。そのため、座標の読み取りと点のプロットを継続して個別

支援を行った。第9時で傾きと切片の用語の理解はでき、机間指導の際の一問一答形式のやりとりでグラフをかく手順を説明できるようになっている。第14時までは補充的な学び直しをメインとし、常に既習内容を振り返らせながら、既習内容の定着を目指した。その結果、第15時では与えられた点をプロットし、そのデータをもとに帰納的に考えることができ(資料5)、第16時ではグラフから携帯電話のプランの特徴を読み取り、自分の言葉で説明することができている(資料6)。点のプロットからグラフまで自力で解決できるようになり、学習問題にも進んで取り組めるようになった。

本実践を通して、生徒Aは座標のつまづきを解消することにより、学習への理解をより高めることができ、主体的に課題に取り組むことができたと考えられる。

24分にもえつきると思います。
なぜかという、線ひきでちょくせんですこしだけひいたら24分だったからです。

資料5 第15時 下位生徒の様子

1か月に30分以下はなすのであれば、Cプランがおとくとなっております。1か月に100分以下はなすのであれば、Bプランがおとくとなっております。1か月に100分以上はなすのであれば、Aプラン。

資料6 第16時 下位生徒の様子

4 研究のまとめ(成果・課題)

(1)成果

意図的に既習の学習内容に関連付けることが、補充的な学び直しにつながり、考えることを苦手とする生徒でも筋道を立てて考えようとする姿が見られた。

(2)課題

知識だけを学び直すのではなく、生徒自身が学び直した事柄を使って本時の学習につなげていけるような学び直しが必要である。

[引用] *1 和田義信『著作・講演集(2)考えることの教育』, 東洋館出版, 1997年

Ⅱ 特別支援学校編 Ⅱ

高等学校段階における インクルーシブ教育システム構築に向けて ～学校間における交流及び共同学習を通して～

県立印旛特別支援学校教諭 あかま たつき
赤間 樹



1 研究主題について

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（文部科学省,2012）では、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ時間である交流及び共同学習の推進や学校間連携の推進が求められている。

交流及び共同学習は、学習指導要領においてその意義が示され、障害のある子どもにとって有意義であるばかりではなく、小・中学校等の子どもたちにとっても、障害のある子どもとその教育に対する正しい理解と認識を深めるための機会として必要とされている。学校間の交流及び共同学習（以下、学校間交流）について文献や書籍等を調べていくと、特別支援学校高等部と高等学校の学校間交流の実践例が少ないことが分かった。

本研究では、インクルーシブ教育システム構築の観点から、県内の特別支援学校高等部と高等学校の学校間交流の現状と課題を調査した。その中で学校間連携を計画的・組織的に取り組む方法を探り、高等学校段階の生徒が共に学び合える場の構築を目的として、本主題を設定した。

2 研究目標

- (1)県内特別支援学校高等部と高等学校の学校間交流の現状及び課題を明らかにする。
- (2)特別支援学校高等部分校と高等学校の交流及び共同学習から、計画的・継続的に実施できる活動や連携体制の検討、生徒や教

師の意識の変容について明らかにする。

3 研究の具体的内容

(1)調査研究

- ①目的 特別支援学校高等部と高等学校の学校間における交流及び共同学習の現状と課題を明らかにする
- ②内容 選択・記述併用の質問紙法（回収率 100%）
- ③対象 (ア)～(ウ)の交流及び共同学習の担当者または実施状況を把握している者

(ア)県内特別支援学校高等部、高等部分校及び分教室 36校

(イ)高等部分校及び分教室が設置されている高等学校 4校

(ウ)上記(ア)の交流相手校である高等学校 20校

④結果と考察

③の(ア)への質問「高等学校との学校間交流の実施の有無」では、実施校と未実施校は約半数であった。実施している活動は様々な形で取り組まれており、特に学校行事や特別活動で多く実施されていた。年間計画の中でも日程が決まっている学校行事であれば来校しやすいことが要因として考えられる。通常授業での取組では、各教科や作業学習等が挙げた。

実施校とその交流相手校である③の(ウ)への質問「活動内容や生徒への効果について」では、「10年以上取り組んでいる」等の回答がある一方で、「目標やねらいがあ

いまい」「生徒に交流の意義を伝えにくい」等の記述もあり、同じ場を共有しているだけになりかねない懸念もみられた。

(2)実践研究

①目的 教科の授業で交流及び共同学習を実施し、生徒や教師の意識を調査する。

②内容 アンケートによる生徒や教師の意識調査、ビデオによる生徒同士の関わり方の分析。

③対象 X分校の全学年48名、Y高校の選択科目体育（以下、選択体育）受講の3年生34名

④実施までの経緯

調査研究を踏まえ、教科の授業での交流及び共同学習を計画した。題材の候補としてパラリンピック正式種目であるボッチャを挙げ、保健体育、総合的な学習の時間、LHR等から両校で調整を図った。高等学校の教育課程の中でも授業内容を柔軟に対応できる選択科目が候補に挙がり、選択体育で実施することとなった。

⑤題材設定の理由

ボッチャは、重度身体障害者の競技スポーツへの参加を可能にするためにヨーロッパで考案されたスポーツで、東京パラリンピックでも実施される。両校の生徒にとっては、全員が未経験の種目である。どちらかの生徒が教える、教えられるという関係ではなく、お互いが初めて取り組み、共に学び合える理由から、ボッチャを設定した。

⑥単元の計画

(7) 合同で取り組む授業を「共同授業」と呼び、教師、生徒間で共通理解を図った。事前学習を各校で取り組んだ後、合計3回の共同授業を計画し、リーグ戦に取り組んだ。

(1) チーム編成は、共同授業1回目からX分校とY高校の生徒で混合チームを編成すると、不安や緊張等の負担が大きいのではな

いかと考え、1回目は同一校チーム、2・3回目を混合チームとした。

(ウ) 自己紹介ツールとして名刺を作成し、混合チーム編成時に交換することにした。

⑦結果（授業実践）

(7) 名刺交換

氏名、好きなスポーツ・歌手等の共通項目を設け、生徒自身で作成した。名刺交換後は共通の話題を話し合ったり、好きな映画名をチーム名にしたりするなどの成果があった。授業後には名刺裏にメッセージを書いて返すようにし、「〇〇さんのおかげです」等の記入があった（写真1、図1）。



写真1 名刺交換
左から2番目：X分校生徒、右端：Y高校生徒

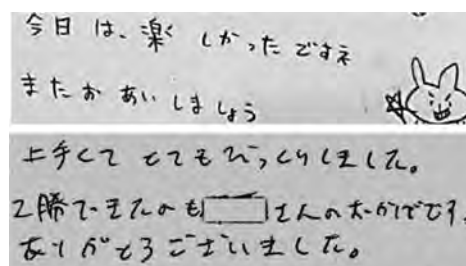


図1 名刺裏へ記入したメッセージ
上：X分校生徒からY高校生徒へ
下：Y高校生徒からX分校生徒へ

(1) 共同授業前後の生徒の意識

事前学習後に事前アンケート、3回目の共同授業後に事後アンケートを実施した。

a 「一緒に授業を行うこと（行ったこと）について」（図2、図3）

事前アンケートでは、Y高校生徒は全員が「楽しみ」と答えていたのに対し、X分校生徒は約4分の1が「楽しみでない」と

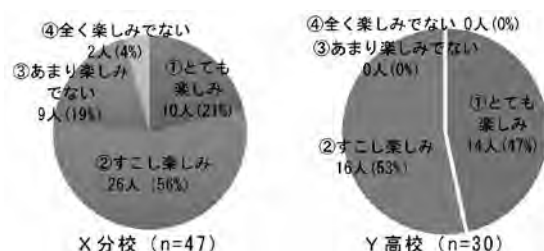


図2 事前アンケート「一緒に授業を行うことについて」(選択回答)

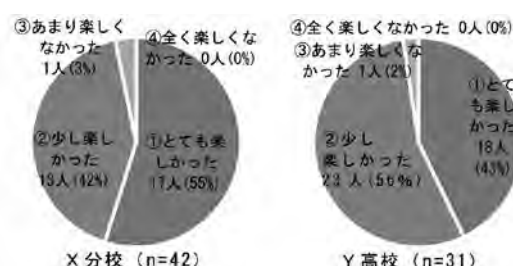


図3 事後アンケート「一緒に授業を行ったことについて」(選択回答)

回答した。事後アンケートでは、両校ともにほぼ全員が「楽しかった」と回答した。

b「相手校生徒や学校に対する印象」について(図4、図5)

自由記述で求め、回答内容を肯定的記述、否定的記述、どちらともいえないに分けて集計した。X分校の事前アンケートでは、肯定的21、否定的17と両面の記述があったが、事後アンケートでは、肯定的41、否定的0と肯定的記述が約2倍に増加した。

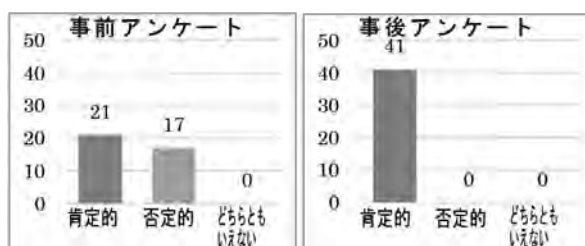


図4 X分校「相手校生徒の印象」の比較

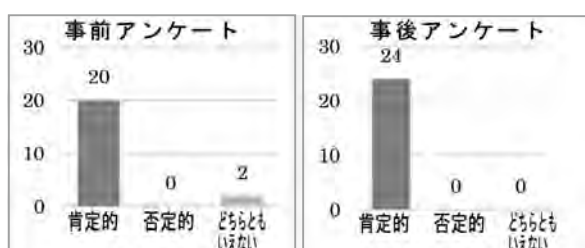


図5 Y高校「相手校生徒の印象」の比較

Y高校の事前と事後アンケートでは、肯定的記述は微増であったが、記述内容に変化があり「優しい」「コミュニケーションが取れた」「同じ高校生なので変わらない」等の記述があった。

⑧考察

実践研究では、ボッチャで授業モデルを示した。連続した授業での計画は、学校行事よりも日程調整や授業内容の検討に時間は要するものの、双方の生徒に適した授業展開を図ることができ、生徒にとって授業内容が分かり、活動に参加している実感・達成感をもちやすくなるといえる。双方の生徒が目標に向けて自然な形で関わり合うことができ、共に協力したり喜び合ったりする活動が生徒の相互理解につながると考えられる。生徒へのアンケート結果からも、肯定的な意識変容が示され、相互理解に成果が得られることが明らかになった。また、活動の工夫として、名刺等のツールを使用することや、各校2名以上でグループを組むこと等、生徒の心理面の配慮を行うことが有効であることが示唆された。

4 成果と課題

教科の授業での交流及び共同学習は、生徒や教師にとって授業の目標や活動内容を共有しやすく、関わり合いながら取り組める活動であり、生徒の相互理解や優しさや認め合う心などの人間性や社会性の高まりに成果が得られることが分かった。

課題として、学校行事等での学校間交流においても、ねらいや目標を明確にし、生徒同士が関わり合える活動を計画する必要がある。社会の出口である高等学校段階であるからこそ、お互いの人間性や社会性を高める交流及び共同学習の充実が必要であり、学校全体での積極的な取組が必要である。